

特別支援教育における木工活動を中心とした生活単元学習の取り組みⅡ

～他者とのかかわりを中心に～

A practical study on the life unit with woodworking activities for special needs education Ⅱ
～ From the view of relationships with others ～

加藤 智子*
Tomoko KATO

尾崎 啓子**
Keiko OZAKI

【概要】本研究は、平成27年度に教育学部附属特別支援学校中学部3年生で取り組んだ、木工製作活動の実践を素材として、他者とのかかわりの観点から生活単元学習のもつ可能性を検討した報告である。中学部2年間で積み重ねた学習経験から、知的障害のある生徒たちが見通しを持って取り組める木工活動を基盤にした他者とのかかわりを段階的に設定することは、自信や製作への動機づけを高めることに役立った。「誰が」「何を必要としているか」「誰に」「何を製作するか」を、活動の導入で伝えることが、生徒の主体性を引き出す上で重要であった。

【キーワード】木工学習 生活単元学習 交流及び共同学習 他者とのかかわり 主体性

1 はじめに

「木育」という教育がある。平成18年9月に閣議決定された「森林・林業基本計画」によれば、「材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ教育活動」を意味し、推進されている。木育を進める上で、まずは木材のもつ「暖かさ」「やさしさ」に触れて木材の良さを体感的に理解し、各年齢層に応じた活動内容を考え、楽しい活動となるよう工夫することが求められている。また、木材活用の良さについて、学校環境整備の観点からは、高い吸湿性や香りの良さなどの木材の優れた性質を活用した木造校舎の建築や、学校内装木質化を進めることは、児童生徒の心身の健康の増進や居場所づくりにも役に立つこと、子どもの学びや遊び・コミュニケーションを促進する機能が期待できることなども、先行研究から示唆されている(浅田ほか、2012・長南ほか、2014・尾崎ほか、2015)。

埼玉大学教育学部附属特別支援学校(以下、本校と記載)では、平成25年度に小学部の中庭にウッドチップを入れた遊び場を造ったり、小・中・高等部の校舎内の玄関部分を中心に柱や廊下の腰壁の部分と一部の教室に木版を貼るなどの木質化を行った。保護者、教職員、児童生徒にも好評だったため、平成26年度以降も引き続き内装木質化を進めている。特に平成26年度には、中学部2年生の生徒6名が中心となり、担任の指導を受けながら、生活単元学習の中の木工学習の一環として、教室や廊下の腰壁に木版を貼る活動に取り組んだ。彼らの1年間の学習活動については、別稿で報告している(加

藤ほか、2016)(以下、前年度実践と記載)。考察として、年間を通して活動の過程と結果がわかりやすい木工を扱い、知的障害をもつ生徒が見通しを持って製作活動に取り組む、「注文→製作→納品→感謝・報酬」というサイクルを体験することにより主体的な姿勢が見られるようになったこと、ひとりひとりの能力を高めるための状況づくりと協働活動ができる関係づくりが重要であることを挙げた。

本研究では、前年度実践で対象となった生徒たちの、中学部3年間の学習のまとめとして、木工活動を中心とする生活単元学習に取り組んだ実践を取り上げる。実践においては、障害のある生徒が様々な場面で他者とかかわる体験を重ねながら学習することを重視した。他者とのかかわりについては、身近な人とのかかわり、一般社会の中でのかかわり、大学および附属学校園との連携、の3つの観点から検討し、その効果的な在り方についても考察する。

2 生活単元学習

特別支援教育における生活単元学習は、子どもが社会生活を送る上で必要となる事柄を体験的、实际的に学び、自らの生活を主体的、自立的に営むことができることをめざす学習であり、領域・教科を合わせた学習として遊びの指導や作業学習と共に教育課程の中心に位置づけられている。本校においても、特に中学部では学校生活の中心的な学習として、年間を通してテーマのある生活単元学習を行っている。テーマを設定す

* 埼玉大学教育学部附属特別支援学校

** 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

ることにより、何をするのが明確になり、より見通しを持って取り組むことができる。そして、活動の中では生活にかかるすべての事柄を横断的、総合的に学習していく。また活動内容は学級内で同じであっても、役割分担や支援の方法を変えて、目標を達成できるように設定している。

3 学習の中での他者とのかかわり

(1) 障害のある生徒と他者とのかかわり

国連の「障害者の権利に関する条約」の締結に伴い、我が国でも平成28年4月から「障害者差別解消法」が施行された。ここでは、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指すことが明記されている。現在、教育の現場でも、共生社会の実現に向け、「交流及び共同学習」が実施されている。特別支援学校小学部・中学部学習指導要領(平成21年3月)においても、生徒の経験を広めて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性をはぐむために、学校の教育活動全体を通じて、交流及び共同活動を積極的に進めていくよう明示されている。

(2) 本校における交流および共同学習の実態

交流及び共同学習では、障害のある子どもたちとない子どもたち、地域社会の人たちとが、ふれ合い、共に活動する機会を学習の中に効果的に設けることが大切とされている。大学の附属学校である本校では、これまで幼稚園・小学校・中学校の附属学校3校園との交流を行ってきた。毎年の恒例行事として、附属幼稚園の親子遠足を本校で実施したり、小学部と附属小学校が4年生を中心に互いの学校で交流する機会を持ったり、附属中学校吹奏楽部が本校の学習発表会に出演し演奏したりしている。ただし、本校は大学や他の附属校園と所在地が離れているため、交流は限られたものになっていることや、大学とのかかわりはほぼないことが現状である。また、本校は生徒の居住地は「公共の交通機関を使って60分以内で登校できる地域」となっており、広域にわたっている。そのため、生徒の居住地域での交流及び共同学習を進めていくには難しさがあり、積極的に取り組まれていない。しかし、障害をもつ子どもにとって、他者とのかかわりをたくさん経験することは、社会に出てから周囲の人々とよい関係を築いていくためのスキルを学ぶ貴重な機会であり、社会性や人間性を育てるためにも大切なことである。そこで中学部では、生徒の発達段階も考慮し、生活単元学習の中でも特に他者とかかわりのある体験的な学習を重視している。校内での学習に、仲間同士の交流やお客様を招いて行う授業など他者とかかわりのある活動を設定している他、校外での学習も、様々な人々とかかわりから体験的に学べるよう配慮をしている。また平成27年度は、新たな試みとして大学の学生や教員とかかわりについても計画し、実施した。

4 対象学級の取り組み

(1) 生徒の実態

対象学級は中学部3年生、男子5名、女子1名の計6名で構成され、半数が自閉症スペクトラムである。知的障害の他に、身体障害者手帳の交付を受けている生徒も2名いるが、大きな運動制限はない。これまでの2年間、生活単元学習において、木工を中心とした活動に取り組んできた。具体的には、1年次は「もりのピザ屋さん」を開き、ピザを提供してお客様におもてなしをする学習に取り組んだ。お店で使うピザプレートやコースター、看板、小物等を木材で製作した。お店に来てくれたお客様にも、お土産として製作したピザプレートやコースターをプレゼントした。2年次は、「もりの大工屋さん」と題して、学校生活の中で「こんなものがあったら便利」というものを、学内の先生方から要望を受けて制作した。手洗いに使うポンプ石鹸を乗せる台やみんなが使う掲示板、畑の穴をふさぐテーブル等、約20点の作品を製作した。製作した物は、学内の児童生徒や依頼した先生方が普段使用することとなった。どちらの活動も木工を活動の手段としているが、生徒の主體的な姿を導いたり、物事に対する達成感や成功体験を重ねたり、職業観や勤労観を育んだりすることを目的としている。木工活動においては、叩く、引く、つまむ等の単純な運動動作に個人差はあまり見られないが、目的物を注視することや手指の巧緻性、道具の細かい操作については個人差が大きいといえる。コミュニケーション面では、発声のみの生徒、単語や二～三語文で伝えることのできる生徒、文字の読み書きは難しいが自分の思いを口頭で伝えることができる生徒など実態差がある。これまでの活動で、友だちとかかわる活動において、伝えるべき言葉を役割の手順として設定することで、決められた言葉を相手に伝えることができるようになってきた。

(2) 木工学習に期待できる効果

特別支援教育において木工活動を扱うことについては、その効果として、素材の加工のしやすさを活かし子どもの実態に合わせた興味ある活動(ものづくり)を設定できること、釘を打つ・切断する・塗るなど1つ1つの活動の動作やその結果が明確なため見通しを持って活動できること、手指の巧緻性から生活動作の向上へ繋げた学習を設定できること、活動の結果を形にすることで達成感を味わうことができること、作った物を製品として扱うことで職業観や勤労観を育成することができることなどが挙げられる。一言で言えば、木工活動のよさとは分かりやすさと達成感であると考えられる。また、前年度実践の副次的効果として、教室に木の腰板を貼ることで活動環境が木質化され、それに伴い、湿度が調整された室内で心地よく活動に取り組めることも挙げられる。

以上のことから、本学級の生徒は、木材を使っ

を作ることには見通しと自信を持って活動に取り組むことが期待できる。中学部卒業を迎える27年度は、これまで積み重ねてきた経験を活かし、お世話になった方々や学校に、木材でものを作り感謝の言葉と共に贈る活動を年間を通して行った。また、将来の働く生活に向けた学習として、木工活動を内容とする校内実習を計画し、製作した製品を大学の文化祭で販売する活動も行うこととした。障害の特性から、人とのかかわりを感じ、社会の中で生きていくためのかかわりを経験できるようにしたいと考えた。

(3) 年間指導計画

年間テーマを「もりの宅配便 ありがとうとえがおを届けよう」とし、木工で物を作り、これまでにお世話になった方々にプレゼントをする活動を行う。これまでの他者とのかかわりを見つめ直し、自分を支えてくれる人の存在に気づき、人に感謝する気持ちを育んでいくことを目的とした。手段として、木工で物を作ってプレゼントをする活動を設定した。

	単元名及び内容	他者とのかかわり
1学期	「お世話になった先生にありがとうを届けよう①」 一昨年度までお世話になった校長先生と事務職員（現在は大学にて勤務）に木工製品を贈る 「校内実習をがんばろう①」 校内実習で木工製品を製作し、大学で販売活動を行う	身近な人（前校長先生、事務職員） 大学の学生や職員
2学期	「お世話になった先生にありがとうを届けよう②」 これまでお世話になった先生6名に木工製品を贈る 「学校にありがとうを届けよう」 修学旅行で木こり体験 機械での製材体験 卒業記念品の製作 「校内実習をがんばろう②」 校内実習で木工製品を製作し、大学祭にて販売 近所の幼稚園から製作依頼を受け、納品	身近な人（校内の教員） 修学旅行先の方々、大学の学生 保護者や大学生、来場された一般の方々 幼稚園児
3学期	「家族にありがとうを届けよう」 これまで育ててくれた両親に木工製品を贈る 「中学部にありがとうを届けよう」 中学部の教室や廊下の木質化（木壁貼り） 「自分にありがとうを届けよう」 3年間頑張った自分のために、椅子を製作する	身近な人（家族） 身近な人（同じ学校の仲間） 工房の職人

(4) 他者とのかかわりから育てたい力

人が社会の中で生活する上で、他者とのかかわりは必要不可欠である。特に障害をもった子ども達は、障害の特性から人とのかかわりを苦手とすることも多いが、自分の意志を伝えられること、困った時に他者に助けを求めることなどは、身につけておきたいスキルである。本学級にも人とかかわることを苦手とする生徒もいるが、活動の中にかかわりを設定することで、初めは役割として他者とかかわらなければならない状況を作り、経験を積み重ねられるようにする。その経験から、設定された状況下で決まった形の言葉を相手に伝える力をつけることを意識した。相手とのやりとりの経験を増やすことで、類似した別の状況においてや、自分で考えて言葉を伝えられること、つまり自分で判断をしながらかかわることができる力をつけていきたい。また、これまでお世話になった方々に感謝を届けるという設定をして活動に意味をもたせることで、他者の存在を感じ、他者を思いやる心を育てていきたいと考えた。他者とかかわるということは、相手の存在を認め、相手のことを考えることに繋がる。将来の豊かな生活に繋がるような他者とかかわる力をつけていくことを目標とした。

(5) 他者とのかかわりを有効なものにするための方策

・活動の導入を大切にす

感謝を届ける活動を行うにあたり、これまでの生活を振り返ることで、お世話になった先生方の名前が子どもたちの意見から出るように配慮した。また、木工製品を作る際も、誰のために何を製作するのかを常に意識できるように、授業の導入の段階で確認して取り組んだ。これらにより、活動に目的意識をもち、より主体的に取り組めると考えた。贈る人の存在を感じ、これまでのかかわりを振り返り、お世話になった経験を思い出して、それを感謝の気持ちに表すことができるよう配慮した。中には理解が難しい生徒もいるが、贈る相手の写真や動画を見ることで誰に渡すための物なのかわかるように工夫した。

・「本物の活動」を大切にす

活動の中では、体験しながら学習していくことを大切にす。本物を体験することは、時には子どもにとってうまくいかないことや葛藤する場面も多くあるかもしれないが、その一つ一つの体験が心をより成長させていくはずである。校外学習先では本物の体験ができるように計画し、体験先では教員の介入は最小限にして子どもと関係する方々とのかかわりを見守る姿勢で行った。また、販売活動についても本物の金銭のやり取りを行うことで、より活動に緊張感を生み出した。

・繰り返しから般化へ

障害特性から他者とのかかわりを苦手とする生徒もいるため、かかわることを活動の1つとして設定した。他者とかかわって活動することがその生徒の役割となるので、やり過ごすことはできない状況にするのであ

る。役割として決められた相手に決められた言葉でやりとりをする経験を重ね、最終的には自分で判断をして場面や状況に応じたかかわりができるようにすることを目標とした。

(6) 実践

①「お世話になった先生にありがとうを届けよう」





・前校長先生や事務職員の方へ



先生方が希望されていた書類ケースを作成した。完成した製品は、校外学習として大学の研究室を訪問して直接先生方へ手渡した。初めての大学訪問だったが、そこで知っている先生に出会ったことで子ども達は安心し、予定通りの活動をする事ができた。製品を受け取った先生は、子ども達の目の前で机に積まれた書類を入れて、とても役立つことを伝えてくれた。これを見て子ども達は、先生のために製作してよかった、自分達の気持ちが伝わった、という思いを抱く事ができた。



・これまでかかわった先生方へ

これまでの学校生活で特にかかわりの深かった6名の先生方に、木工製品を作成して贈った。製作にかかる前に、お世話になった先生を尋ねて、来春卒業するという報告と、欲しい物を聞くという活動を行った。直接先生方から欲しい物を聞くことで、製作中には誰のために何を作っているのかを常に意識しながら取り組む事ができた。

<p>中学部主事の先生へ中学部職員室前の掲示板を作成</p>	 <p>贈った掲示板は、中学部職員室前の廊下に設置し、使用されることとなった。自分達が作ったものが活用されているのを日々目にすることができた。</p>
<p>前担任の先生へウクレレスタンドを作成</p>	 <p>ウクレレは音楽で扱っていたため身近に感じている楽器であった。いつも子ども達のことを気にかけてくれている親しみのある先生への贈り物ということもあり、プレゼントを我先に渡そうとする子ども達の姿が見られた。</p>
<p>保健室の先生(養護教諭)へ保健室の隙間にぴったりとはまる棚を作成</p>	 <p>昨年度石鹸台を贈っていることもあり、見通しを持って活動をする事ができた。棚の隙間の幅を正確に計り作成した。</p>
<p>事務の先生方へ書類ケースを作成</p>	 <p>目の前の書類の山を見て、子ども達も書類ケースをプレゼントしないと、という気持ちをもって製作にあたった。</p>

<p>校長先生へ大学の研究室前の「ポスト」を作成</p>	 <p>以前にも校長先生には製作をしているため、より見通しを持って活動ができた。より大きな声で伝えようとしている姿から、自信を持って取り組んでいることがうかがえた。</p>
<p>副校長先生へ副校長室前に掲示する「行き先ボード」を作成</p>	 <p>「いつも不在がちで部屋にいないため、行き先ボードがあると便利なので作って欲しい」と具体的に要望をいただいた。これがあると副校長先生が助かるという思いをもって製作することができた。</p>

②「校内実習をがんばろう」

校内実習で長い時間働く経験をするにあたり、これまで取り組んできて、子どもたちが見通しと自信を持って取り組む事ができる木工活動を設定した。働く目的を「製品を販売してお金を稼ぐ」とし、そのためにより丁寧に仕上げないといけないという意識をもちながら行った。

実習では、書類ケース、木のクリップを製作した。1日中仕事ができるように時間割を変更して、1週間取り組んだ。大学でお店を開く前には、大学に出向いて宣伝活動(チラシの配布)も行った。お店では、初めて自分達の製品を並べてお客様に手にとってもらう機会となった。ここでは、販売ではなくお店を開いての接客活動体験とした。普段は立ち入ることのない場所(大

学) だったが、練習した通りお客様に製品の説明をしたり、呼び込みをしたりする姿が見られた。また、チラシ配りの宣伝活動では、全ての学生がチラシを受け取ってくれるわけではなく、大学という限られた社会の中でも、一般社会のような厳しさも少し味わうこととなった。しかし、それでも諦めずにチラシ配りを続ける姿が見られた。



③幼稚園からの依頼

近所の幼稚園から依頼を受けてパズルケースを製作した。自分たちが作った製品を園児に渡し、たくさんのお礼の言葉や歌のプレゼントをいただいた。普段かかわることのない幼稚園児とのかかわりであったため、貴重な経験となった。これまでの生活の中で子どもの声が苦手という生徒もいたが、園児とのかかわりを嫌がることなく自然に接することができていた。



④大学祭に出店

製品を販売するにあたり、これまで何度も作ってきた製作に自信を持っている書類ケースや木のマグネットの他、大学の教育学部技術専修で木工を扱う講座から製品アイデアの協力をいただき、スマートフォンスタンドを製作した。また、事前に同じ教育学部美術専修の学生と一緒に大学祭に向けて大学構内に設置する立て看板を製作する活動にも取り組んだ。大学祭当日は、お店の準備をした後、チラシ配りをして宣伝活動を行い、2時間程販売活動を行った。保護者、大学生、教職員の他、大学祭を訪れた一般のお客様にも多く来店していただき、本物の販売活動を体験することができた。教室で何度も練習を重ねることで、本番では、初めてのお客様を相手にしても練習通りの活動を行うことができた。



⑤「学校にありがとうを届けよう」

(卒業制作で木琴作り)

これまでの学習のまとめと発展という位置づけで、修学旅行を山形県金山町方面へ計画した。金山町は最上地方にある自然豊かな町で「金山杉」が有名な林業の町である。ここでのメインの活動は、山での木こり体験であった。秋雨の降る天候の中であったが、レインコートとヘルメットを装着して山へ入り、チェーンソーを使って大きな杉の木を切り倒す体験を行った。チェーンソーで木を切る感触や漂う杉の香り、徐々に木が倒れていく音、倒した木の重さ等、体全体を使って活動をすることができた。他にも現地の方々と一緒に自然の中でいくつもの製作活動に取り組んだ。



切り倒した木は、手で皮を剥き、丸太のまま大学に持ち込んで技術講座の協力を得て製材した。講座の学生に手伝ってもらいながら、生徒たちは自分の手で木材を機械にかけていった。山から切り出した丸太と、これまで木工活動に使用していたホームセンターで購入するような角材が、生徒の実際の体験としてここで初めて繋がったのである。その後、製材した木材を持ち帰り、卒業制作として木琴作りを行った。



⑥「中学部にありがとうを届けよう」

昨年度、自分達の手で教室を木のお店にするために、壁に木の腰板(木壁)を貼る活動を行った。木壁を貼った教室は明るく木のぬくもりのあるものとなった。卒業前に、中学部の廊下や来年度入学してくる新入生のために、1年生の教室や中学部前の廊下の木壁貼りに取り組んだ。これは直接相手の存在する活動ではなかったが、これから入学してくる1年生が喜んでくれるだろうと想像しながら取り組む姿も見られた。見えない他者の存在の他、それに対する自分達の存在(立場)を感じ、「最上級生としての自分達が行うべきこと」と意識して取り組んでいる言葉も聞かれた。



⑦「家族にありがとうを届けよう」

いつも一緒にいて当たり前、やってもらって当たり前
 前の存在の両親に、これまでお世話になった感謝の気
 持ちを込めてプレゼントを製作した。一番身近な存在
 である両親に感謝の気持ちをもつということは簡単で
 はないが、お父さんお母さんの
 ことを思ってプレゼントを作るとい
 う形で取り組んだ。修学旅行で自
 分達の手で伐採した金山杉の輪切
 りを使った時計を作成した。



⑧「自分にありがとうを届けよう」

これまでの3年間の木工活動の集大成として、木工
 での作りに取り組んできた自分へ形に残る作品を製
 作した。製作は、何度もお世話になっている椅子製作
 工房で行った。工房で扱う本物の木材を使用し、自分
 の椅子を製作した。何度もお世話になる中で、工房の
 職人の方にも子ども達のことをよく理解していただき、
 対応していただくことができた。職人さんの話をよく
 聞きながら、そして手伝ってもらいながら、全員が椅
 子を完成させることができた。木材の重みや柔らかな
 手触りを感じながら製作をすることができた。



5 考察

平成27年度は木工での作りの活動に取り組みなが
 ら、活動の中には他者とのかかわりをより多く設定し
 てきた。これまでは、障害の特性や子どもの実態から、
 役割として設定されていればその通りに自分の役割を
 果たすことができる生徒は多いが、それ以上の力の発揮
 は見られないのが現状であった。しかし、将来他者とか
 かわりながら生活をする上で、決まり切った言葉や対
 応であっても、コミュニケーションを行う経験を多様な
 場面でより多く積んでおくことは、大切なことである。
 そこで、これまでの学習で取り組んできて見通しの持
 てる木工でのものを作るということを活動の手段として
 かかわりを設定することで、かかわることにも自信を持
 てるようになって考えた。実践の中では、身近な友だ
 ちとの教室内でのかかわりから、校内での先生方との
 かかわり、さらに大学という限られた社会の中でのか
 かわりを段階的に経験していった。身近な人から見知
 らぬ人へと対象を移し、学習場面を広げていくことで、
 生徒は既習事項を活用して（または経験したということ
 を自信として）次の段階へと進むことができたと思え
 る。そして、このような段階的な経験の積み重ねにより、

その先の一般社会でのかかわりの基礎となるものが培
 われていくのではないかと考える。その点で、大学の附
 属学校という利点を活かし、大学という小さな社会に
 おいて、製材の体験や自分達のお店のチラシ配り活動、
 販売活動を行うことができたことは、他ではできない
 貴重な経験となった。

加えて、他者とかかわる際には、相手のことを思う
 こと、相手から評価（返事）を受けることも活動に付
 随してくる。その点では、活動の導入に「だれに」「何
 を」製作するのか、「だれが」「何を必要としているのか」
 を伝えてから活動に取り組むことが、主体的な活動を
 導く動機となっていたと言える。また、身近な人々か
 らのよい評価をたくさん受けることで、製品づくりと
 かかわりの成功体験を積んだことが、次の段階へのさ
 らなる動機付けとなっていたと考えられる。

実践中のかかわりは、先述した一般的な交流及び共
 同学習で行われるような「同年代の相手」との学習を
 設定するものではない。同年代の子どもとのかかわり
 も大切であるが、それよりも、他者のことを考えて活
 動をすること、自分が社会の中に入って活動すること、
 そして体験先で多くの人々とかかわりながら活動する
 こと等が、生徒の心や頭を働かせてよりよい経験とな
 ると考える。

6 おわりに

今回の実践から、自分と異なる多様な立場の人々と、
 多様なかかわり方ができる学習を計画的に進めること
 が大切であると感じた。そして特別支援教育において
 は、それをより体験的、实际的に学習できるように計画
 していかなければならない。生徒達にとって「かかわる」
 こととは、他者の存在に気付くことであったといえよ
 う。身近な人から社会へ、そして最後には両親へのか
 かわりを設定したことで、生徒達が、一番感謝してほ
 しい親への思いを少しでも抱くことができたのではない
 かと考える。

今回の実践では、木工でのものづくりを活動の手段
 としてきた。山での木こり活動においては、その目的を、
 「自分達が製作する物の材料として木を切って来る」こ
 との他に、「山にたくさん木が生い茂ると下まで光が届
 かず、木が育たないから木を間引く必要がある」とい
 う理由も生徒に伝えた。全員が理解することは難しい
 が、繰り返し画像を交えて伝える事で、生徒は少しづ
 つ理解し、「たいへんだ、木を切らないといけない」と
 いう言葉も聞かれるようになった。また、3年間木工活
 動に取り組んできたことで、生徒達は木材を扱うことに
 慣れ、見通しを持って活動に取り組む事ができた。何
 よりも、木材で何かを作るということに自信を持って
 いる。それは、これまで作ってきたものを他者へ贈り、
 たくさんの称賛や感謝の言葉を受け取るとともに、作っ
 た物が実際に使われている場面を見てきたことで自己
 有用感を抱くことができたからであろう。この3年間、

生徒の実態から、扱う素材として木材を選び、見通しの持ちやすい木工活動が適していると考え、木工活動に取り組んできたが、特別支援教育における「木育」にはまだまだ他にも活用できる余地があると感じている。

【付記】

本研究は、平成25年度～28年度・科学研究費補助金(課題番号：25350922、研究代表者：尾崎啓子)を受けて行われた研究の一部である。

【参考文献】

- 1) 浅田茂裕・長南あずさ・大西遼介・新井翔大・尾崎啓子 2012 内装木質化された校舎における中学生の学校生活とストレス反応について 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第11号、pp. 23-30
- 2) 尾崎啓子・吉川はる奈 2015 特別支援学校内装木質化が知的障害のある子どもたちの「遊び」に及ぼす影響について 第62回日本小児保健協会学術集会講演集、pp. 242
- 3) 長南あずさ・尾崎啓子・浅田茂裕 2014 学校校舎における木材利用の現状 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第13号、pp. 39-46
- 4) 加藤智子・尾崎啓子・浅田茂裕・仙石大吾 2016 特別支援教育における木工活動を中心とした生活単元学習の取り組み 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第15号、pp. 53-60
- 5) 文部科学省 2009 特別支援学校学習指導要領解説 教育出版